

セブンベル、ローズベル、グリーンベル……。愛知県内を中心に「ベル」の名を冠した八つのクリニックをこの六年間に開設した。

大や愛知県の稲沢市民病院などに勤めた。周産期医療の崩壊が社会問題になってきた時代。勤務を通して、若手医師が産科を敬遠する理由の一つは、一人で開業して休みなく働き続けるスタイルが時代に合わなくなってきたと考えた。

医人伝

は、さらに三カ所を新設する。

「二十年計画の一次として、八年間に二十施設を目指してきました。予定より遅れていますよ」

長野県生まれ。名古屋大を卒業し、産科医として同

「チームによる周産期医療の新しいビジネスモデル」と名大医局の先輩二人を仲間に引き入れ、四十一歳で医療法人葵鐘会（愛称ベルネット）を設立。稲沢市内にセブンベルクリニックを開いた。

経営拡大には医師の確保が不可欠だ。報酬は開業医と勤務医の中間ぐらいで、休みは保証。育児中の女性医師も柔軟に働ける。設備に投資し、助産師を充実さ

産科主体のクリニック 愛知中心に展開

ベルネット理事長 ^{やました}山下 ^{まもる}守さん (46)



「周産期医療の新しいビジネスモデルをつくっていきたい」と語る山下守さん

せて医療リスクを減らす。といった経営理念が賛同を呼び、現在では非常勤を含め約七十人の医師がいる。法人本部に研究部門もつくった。ベルグループで扱うお産は年間七千件と、愛知県全体の約10%を占める。そのデータを基に大学

などと協働して、医療に役立てていく。人口問題や医療政策も、積極的に提言していきたいという。

昨年十一月、名古屋市緑区のロイヤルベルクリニックに心理発達外来を設けた。専用棟に発達障害の専門医らが常勤する体制。民

間クリニックが不採算部門の小児精神科領域に携わるのは極めて珍しい。

「お産を扱う私たちは、障害児の問題には真っ先に携わる必要があります。法人に体力ができてきたので、採算は度外視です」。

将来は「在宅の重症の子どもたちにも、充実したケアを提供したい」と夢を語る。

今でも、週の三分の一はクリニックで過ごし、診療や当直をこなす。仕事に追われ、趣味のクラシック音楽を楽しむ時間がないのが悩みだ。

(編集委員・安藤明夫)

周産期医療に新モデル